

EurekaXIII

六年制通信 No.17 令和7年9月1日(月)号

二学期が始まる

毎年感心するのですがちゃんと鳴くものですね、ツクツクボウシって。あれ、必ず夏休みの終わりになると一斉に「もうすぐ二学期ですよ。夏休みはもう終わりですよ」と鳴くのですが、今年のように異常な暑さでも忘れませんね。偉いものです。そして、当たり前のように二学期が始まりました。皆さん、元気で勉強できましたか。

さて、一学期の終業式で話したことを書いておくようにとリクエストされましたので、少し整理しながら書いてみようと思います。生徒の本分たる勉強をちゃんとこなさいと言いました。そして「今日逃げたツケを払うのは明日の自分」であることを忘れてはならないと、これは三度ばかり強調して言いました。

この後に、「間接努力」の解釈について話しました。No.16で、夏目漱石や森鷗外のような超エリートは人生訓のような本は書かないものだが、幸田露伴のような苦労人は運を引きよせる方法とか、日々の心構えとか、努力をすることの意義とか、幸福になるために何を実践すべきかとか、そんな修養に関する本を書くものだと言った。露伴は江戸時代に出された本は全部読んで全部頭に入っていたと言われる秀才ですがエリート街道は歩いていません。それなのに第一回の文化勲章受章者に選ばれるのですから如何に彼の学識が他に抜きん出ているかがわかります。彼の書いた『努力論』が昭和初期の学生たちに広く読まれたのも当然だと思います。私はこの本の存在を学生時代に恩師に教えられ、すぐに古書店で買いました。恩師はエリート街道を歩んでこられた方ですが『努力論』を高く評価されていました。中に「幸福三説」というのがあって、それが特にお気に入りでした。惜福、分福、植福のことですが、君たち、興味を持ったなら読んでごらん。私が初めて買ったのは昭和2年、忠誠堂出版の小型本です。文庫本サイズですが箱入りで、何が有難いと言って正字正仮名ですがほとんど総ルビなので読めるのです。漢字がわからなくても。岩波文庫には昭和15年に入りましたが、長らく絶版でした。2001年に改訂版が出ています。しかし、これ、ちょっと不親切で現代仮名遣いや新字体にしてあるのは岩波のいつものやり方ですが、ルビが徹底してなくて、そこは読めるというところにルビがあり、これは読めないところに振ってなかったりするのです。それはともかく、この冒頭に「直接努力」と「間接努力」の話が出てくるのです。努力しているのに成果の出ないことがままあるが、それは間接の努力が足りないのだと露伴は言います。例えば、いい俳句を作ろうとして五七五をいくらこねくり回してもそれだけではダメで、もっと広く文学全般、言葉の勉強、つまり基礎の充実を図らないといけない。この基礎の努力が間接努力であると露

伴は言います。これはきっと正しいと、私も思います。しかし「間接努力」を私は長い間露伴と違う解釈をしてきました。「直接努力」とはそのものの上達に直結する努力のことですね。例えば野球が上手になりたくて練習をする。この努力は当たり前です。あるいは家に帰って素振りをする。これも「直接努力」の一つです。私は「間接努力」とは、運を引き寄せる努力だと思っています。終業式で例を出したのは三重中の野球部でした。彼らがあるときから毎朝渡り廊下の掃除をするようになりました。いつも顔を合わせます。私は毎朝観察していました。嫌々やっていないか。適当にやっていないか、挨拶はちゃんとできているか、そんなことをずっと観察していました。生徒諸君は知らなかったと思います。グラウンドでも、近くに車を止めているので練習している彼らを目にします。掃除を始めて少しずつ、彼らの顔つき、グラウンドでの動き、挨拶の声、それらがどんどん良くなっていきました。監督さんにも勝つチームの動きになってきたねと感想を言ったりしていました。掃除をすることで野球は上手にはならないと思います。しかし、私は彼らの様子を見て心から「勝ってほしい！」と思うようになっていきました。つまり自然と応戦しているのですね、毎日のように。目にするたびに「頑張れよ」と呟くようにもなるわけです。つまり、自分の知らないところで「応援される人間」になっているわけです。これが運を引き寄せているということです。

もちろん三重中学校の生徒諸君はみんな勝ってほしいし、野球部の子たちがたまたま私の目に留まっただけで、他にも私の言う間接努力をしている生徒はいると思います。それに「間接努力」は部活動に限ったことではありません。究極、神様というか天に応援されるようになればいいわけですから、「独りを慎む」で話したように誰も見ていないところで小さな善行を続けることです。落ちているゴミをそつとごみ箱に捨てる、そんな行為が幸運の女神は大好きなのですよ。大体このような話でしたよね。

今週のおすすめ

・中村颯希 『神様の定食屋』（双葉文庫）

舞台は定食屋「てしをや」。経営していた両親を交通事故で突然亡くした兄と妹が主人公。気の強い頑張り屋の妹とキャベツの千切り一つできない兄。兄が近くの神社で神様に「料理の上手くなるコツなんてないものか」と愚痴ると、成仏できずにいる料理人たちを兄の体にフュージョンさせるという、なかなか面白い神様。彼らはある人に心を残して死んだがゆえに自分の料理を通して最後の思いを伝えるべく兄の体を借りるわけ。神様の計らいか、食べてほしいと願う人々がうまい具合に「てしをや」を訪れてくるようになっていくのです。兄はどんどん料理がうまくなっていき、「てしをや」も繁盛します。出てくる料理は「チキン南蛮」、「天たまかけご飯」、「具たくさん豚汁」、「フレンチ風オムライス」、「唐揚げ」、「ほくほくおでん」です。それぞれの物語、料理の一皿に込められた思いが読者の心を打ちます。君たちも今のうちに食べたものの味を覚えておくことをお勧めします。私はね、炊きあがったご飯を「おひつ」に入れて濡れた布巾をかけて冷ました後のご飯がもう一度食べたいな。

BGMは 吉田美奈子の 夢で逢えたら でした…。